

ストレンナ 2019

「わたしの喜びがあなたがたの内にあるように」(ヨハネ 15,11)

聖なる者になろう

親愛なる兄弟、姉妹の皆さん、親愛なるサレジオ家族の皆さん、

百年続く私たちの伝統を継承し、この新しい年、2019年の初めに、サレジオ家族が働く、140か国以上から成る「サレジオ世界」各地におられる、皆さん一人ひとりにごあいさつを申し上げます。

ごあいさつと共に、私たちに非常になじみ深い主題について解説をします。その標題は、現代世界における聖性への呼びかけについて語る教皇フランシスコの使徒的勧告、『喜びに喜べ Gaudate et Exsultate』¹から直接取ったものです。

この主題、標題を選んだのは、教皇フランシスコが全教会にあてた聖性への力強い呼びかけを私たち自身の言葉に、私たちのカリスマにのっとり感性に照らして語るためです。²したがって、サレジオ霊性という意味で典型的に“私たち自身のもの”である諸点を、強調したいと思います。我らの愛する父ドン・ボスコを通して聖霊から頂いたカリスマ的遺産として、私たちサレジオ家族、31のすべてのグループが共有するものです。それは、主から来る深い喜びをもって生きるよう、必ず私たちを助けてくれるでしょう：「わたしの喜びがあなたがたの内にあるように」(ヨハネ 15,11)。

この言葉は誰にあてて語られているのでしょうか？

すべての人に語られていると、私は断言します。

愛するサレジオ会の兄弟の皆さん、皆さん全員に語られている言葉です。

サレジオ家族の奉獻生活者として、あるいは信徒として生きるさまざまな修道会、在俗会の兄弟姉妹の皆さん、皆さん全員にあてて語られている言葉です。

サレジオ家族のさまざまな会やグループの兄弟姉妹の皆さん、皆さん全員にあてた言葉です。

全世界の私たちの事業所に関わるお父さん、お母さんたち、教職員の皆さん、カテキスタやリーダーの皆さん、皆さん全員にあてた言葉です。

大きく広がるサレジオ世界の、十代の若者や青年の皆さん全員にあてた言葉です。

¹以下、GEと表記。

²サレジオ会列聖申請人ピエル＝ルイジ・カメローニ神父、そして私たちの列聖申請事務局に専門家として協力し、著名な講演家でもあるロドヴィカ＝マリア・ザネ氏に感謝の意を表します。お二人の先見の明により、このテーマに大きく光を投げかける列聖申請事務局の資料により本文書を豊かに彩ることができました。

私は教皇フランシスコが全教会に呼びかけた招きを受け取りたいと思います。教皇の勧告は聖性についての論文ではなく、人生を召命として、聖性への呼びかけとして生きようという今日の世界への呼びかけ、特に教会への呼びかけです。今日という時に受肉した聖性、一人ひとりの置かれた現実、現状の内に受肉した聖性です。

常に心を魅了するこの聖性の呼びかけを、私は自分のものとし、なぜなら教会における「今日」という時が私たちにそれを求めるからです。同じように、最近の総長たちは皆、サレジオの聖性、また我々が聖なる保護者たち、というテーマに非常に大きく貢献してきました。³

これまでと同じように、これらの論考は、個人的に読むことに加え、私たちの働く“サレジオ世界”の多様な文脈や状況で必要とされる教育・司牧計画のために、適切でふさわしい「指針」となるでしょう。

I. 神はすべての人を聖性へと呼ばれる

私たちの間でさえ、そしてもちろん多くの若者のうち、教皇の呼びかけを聞いた少なくとも人にとって「聖性／聖なる」という言葉は、現代社会で使われる言葉の中でも、違和感を覚えさせ“強く”聞こえる、耳慣れない響きを持つ言葉として感じられたのではないかと私は想像します。聖性への道というと、すべて、現実から逃避する、人を近づきがたくさせる霊性と混同しがちな文化的障壁や解釈があるかもしれません。あるいは最も良い場合でも、私たちの教会で崇敬される絵や像の人たちに使われ、あてはまる言葉として聖性が理解されているかもしれません。

したがって、教皇がキリスト者の聖性の変わることのない妥当性を提示しているのは大変感ずべきことで、“大胆な”ことでさえあります。みことばのうちに神ご自身から来る招き、すべての人一人ひとりの旅路の目標として示されるものととらえなければならない聖性です。神が「わたしたちに望んでおられるのは聖なる者となることであり、平凡で風味に乏しい、曖昧なものにとどまることではありません。」(GE, 1)

聖性への招きは、私たちサレジオの伝統(聖フランシスコ・サレジオ)の自然な一環をなしています。教皇フランシスコの呼びかけでまず耳目を惹くのは、聖性が私たちのための神の根本的な計画に結ばれており、少数の人のためだけではなくすべての人に差し出された招きであるとする教皇の訴えの力強さ、確固とした意志です。普通の人々にとって典型的な、日常の事柄から成る生活を日々送る、普通の人々に向けられた招きなのだと、教皇は訴えています。

それは少数の英雄的な人、あるいは特別な人の聖性ではなく、普通のキリスト者としての普通の生き方：生活が展開するなかで、さまざまな危険や挑戦、神の差し出される機会を伴う、今日に根ざしたキリスト者としての生き方です。

³ P チャーベス, ストレナ 2014 「私たちの固有の召命に従い、聖性の道を歩めるよう、ドン・ボスコの霊的体験から汲み取ろう。神の栄光と人々の救いのため」 AGC 417 (2014); P チャーベス, 「親愛なるサレジオ会員の皆さん、聖人でありなさい！」 AGC 379 (2002) サレジアニタ第 58 号; J.E. ベッキ, 「アルテミデ・ザッティ修士の列福：魅惑的な新しさ」 AGC 376 (2001) サレジアニタ第 55 号; 「第三千年期の夜明けに、聖性と殉教を」 AGC 368 (1999) サレジアニタ第 49 号; E. ヴィガノ, 「聖人ドン・ボスコ」 ASC 310 ((1983)); 「我々の聖性の歩みを共に再構築しよう」 ASC 303 (1982); L. リッチェリ, 「ドン・ルア - 聖性への招き」 ASC 263 [1971]

聖書は、聖なる者となるよう私たちを招きます：「だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」（マタイ 5・48）；「あなたたちは……聖なる者となれ。わたしが聖なる者だからである。」（レビ 11・44）

これは、愛の完成を体験しあかしするようにとの明白な招きです。愛の完成は聖性にほかなりません。実際、聖性とは愛の完成です。何よりも、キリストにおいて肉となった愛です。

聖パウロも、エフェソの信徒への手紙で御父について触れながら、書いています：「天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。イエス・キリストによって神の子にしようと、御心のままに前もってお定めになったのです。神がその愛する御子によって与えてくださった輝かしい恵みを、わたしたちがたたえるためです」（エフェソ 1・4□6）。したがって、もはや僕ではなく友です（ヨハネ 15・15 参照）。もはや、外国人や寄留者でもなく、聖なる民に属する者、神の家族です（エフェソ 2・19 参照）。したがって、私たち一人ひとり、皆が聖性へと呼ばれています：すなわち、神のご計画にしたがい、満ち満ちた、十全に達成されるいのち、神との、そして兄弟姉妹との交わりのうちにあるいのちへと呼ばれています。

聖性は、少数の人に限られた完徳ではなく、すべての人に差し出されている招きなのです。

限りなく尊いものでありながら、^{まれ}稀でも、特異でもありません。信じる人すべての共通の召命、神が一人ひとりの男性、女性に差し出される美しい提案です。

それは、満ち満ちたいのちから人を遠ざける偽りの靈性の追求ではなく、十全に人となること、神の恵みによって完全なものとされる人になることです。イエスが約束されたように、「豊かないのち」です。

聖性は、ものごとを矮小化し硬直を示すような画一化を押し付ける特質ではなく、かえって、常に新たな聖霊の息吹への応答です。聖霊は個々の違いを大切にすることによって交わりを生み出されます — 「実際、歴史をとおして歩み続ける人類に役立つ崇高な理想や計画の起源に」⁴ おられるのは、聖霊なのです。

それは、抽象的なものとして受け入れられ、形式的に実践される価値の寄せ集めではなく、それらの価値を具体的に現わす徳の調和です。

それは、ただ単に悪を退け、善にとどまることができるというだけでなく、たゆみなく、いつも応える開かれた心の、喜びあふれる姿勢で、善をよく生きることです。

聖性は瞬間的に到達できる目標ではなく、神の忍耐と慈愛に伴われ、一人ひとりが自由と献身をもって歩む漸進的な旅です。

異質なものを排除する姿勢ではなく、むしろ、真実な、善い、正しい、美しいものの根本的な体験です。

要するに、聖性は真福八端を生きることです。この世で塩、光となるために；すべての真の靈的体験がそうであるように、余すところなく人間性を生きるよう深く変えられる道です。したがって、聖なる者になるために、自分自身でなくなることで、あるいは自分の兄弟から遠

⁴ ヨハネ・パウロ二世、使徒的回勅『救い主の使命』 *Redemptoris Missio*, 28, Vatican City, 7 December 1990.

ざかることは求められません。むしろそれは、確固とした意志と豊かな人間らしさをもって、そして（時には苦勞して得る）他者との関わりにおける交わりの体験をもって、充実した生活を歩むことです。

「聖人になること」は、キリスト者にとって第一の最も差し迫った課題

聖アウグスチヌスはこのように言いました：「我がいのちを汝は満たし、まことのいのちとしてくださる」⁵ キリストに従う聖性の道の可能性は、神ご自身のうちに見いだされます。キリスト者にとり聖性の道は、キリストにおける神の賜物によって可能となります：聖人たち、特におとめマリアがその姿を見事に映すキリストのうちに、御父のみ顔、そして人のまことの顔の満ち満ちた豊かさが、同時に顕れます。

イエス・キリストにおいて、神のみ顔と人の顔が「一緒に」輝きます。私たちはイエスのうちに、ガリラヤの人に、そして御父のみ顔に出会います：「わたしを見た者は、父を見たのだ」（ヨハネ 14・9）。

人となったみことば、イエスは、御父の完全な、決定的なことばです。受肉の瞬間から、神のみ旨はキリストという方のうちに見いだされます。イエスは、ご自分の生き方、言葉と沈黙、選択、行動のうちに、何よりも、受難と死、復活のうちに、すべての人のための神の計画、神のみ旨とそれにどのように応えるかを、示されます。

今日の私たち一人ひとりのための、この神の計画は、“ただ”キリスト者としての満ち満ちたいのちであり、それは、キリストがどれほど私たちのうちに生きておられるか、また聖霊の恵みによって、私たちがどれほど主イエスのいのち・生き方に自分のいのち・生き方をかたどっているかによって計られます。したがってそれは、特別に際立ったことを行うことではなく、主と一つに結ばれて生きること、主の姿勢、考え、行いを自分のものとするのです。実際、聖体を拝領するというのも、主イエス・キリストの生き方と使命を取り上げ自分のものにしたいということ、私たちが表明し、あかしすることです。

第二バチカン公会議そのものが「教会憲章」で、聖性への普遍的召し出しをゆるぎなく宣言し、誰も除外される人はいないと述べました：「唯一の聖性は、神の霊に動かされ、父の声に従い、霊と真理のうちに父なる神を礼拝し、キリストの栄光にあずかるために、貧しく謙虚にして十字架をになうキリストに従うすべての人の、さまざまな生活の仕方と種々の職務のうちに追求される」（教会憲章 *Lumen Gentium*, 41）。

「身近な聖人」と聖性への普遍的召し出し

エディット・シュタインは、まだ無神論者だったころに経験した二つの出会いから回心へと向かわせる決定的な推進力を受けたことについて書いています：一つは、戦死した友人の妻との出会い。未亡人となった妻は深い悲しみにもかかわらず、驚くべき信仰の光と力とを示していました；もう一つは、教会で出会った年配の女性です。その女性は、家事で忙しい一日の合間に買い物かごを抱え、エディットが美術への興味から訪れていた教会に、入って来たのでした。聖体のイエスの前で深い信頼と礼拝のひと時を過ごすために。

⁵ アウグスチヌス『告白』, 10, 28.

ドン・ボスコの傍らには母親、最初の先生であったマルゲリータ・オッキエナがいました：素朴な学のない農婦、神学の素養ありませんでしたが、賢明な心と信仰に基づいた従順を備えていました。

リジューの聖テレジアは言っています。幼かったときのこと、彼女には司祭の話していることがほとんど理解できませんでしたが、父ルイの顔を見るだけで、すべてを理解するのに十分であったと。

これらの信徒の誰一人として - エディットの友人アンナ・ライナックも、買い物かごを抱えた名も知らぬ女性、マンマ・マルゲリータ、パパ・ルイ・マルタンも - 一生の間、自分が聖なる者だなどと考えた人はいなかったでしょう。また、自分のふだんの態度を通して周りの人に影響を与えていたことにも気づいていなかったでしょう。

この単純素朴でゆるぎない人々の存在、教皇フランシスコの言う「身近な聖人」（『喜びに喜べ』7）の存在は、人生で大切なのは聖なる者であることで、いつか聖人と宣言されることではないことを思い起こさせてくれます。さらに、列聖された聖人たちは、神の民の単純素朴な聖性に養われたということを考えさせられます：前者の栄光は同時に、深い交わりの中に後者の栄光となります。

そして、聖性を生きるということは、神の愛に守られ、救われているという体験であり、その忠実な愛に応えられるようになることです。大いなる賜物に応える責任です。

この観点から、キリスト教霊性への最も重要な貢献の一つは、ジュネーヴの司教、フランシスコ・サレジオによるものであるかもしれません。フランシスコ・サレジオは、「信心」を修道院の囲いから世の中へともたらし、すべての人に聖性を勧める努力をしました。その見事な著作、『信心生活入門』に次のように書いています：「天地創造のとき、植物に、それぞれの種類にしたがい（創世記1・11-12）その実を結ぶよう命じられたように、神は、教会の生きた植物であるすべてのキリスト者に、それぞれの資質や召し出しにしたがい、信心の実をむすぶよう命じられます。したがって信心は、紳士、商売人、召使、王侯、やもめ、おとめ、既婚の女性と、それぞれの身分に従い多様な形で行われるべきであるだけでなく、その実践は、一人ひとりの力、仕事や務めに合わせたものであるべきです [...] そのとき、私たちはどこにいても完徳の生活を希求することができ、希求するべきなのです。」⁶

教会の歴史は、信仰、愛、生き方をもってともし火のような存在となり、現代を含むあらゆる時代を、幾世代にもわたって照らし、今も照らしつづける、多くの女性、男性によって力強く刻まれています。この人々は、パウロが次のように断言したほど、同じように復活の主の力が人生においてどれほど大きなものとなったかを伝える、生きたあかしです（多くの人は言葉に表さないこともあります）。「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストが私の内に生きておられるのです」（ガラテヤ2・20）この人々は、時には英雄的な徳を通して、また時には殉教によっていのちの犠牲をささげることで、また別の時には、「他者のために死に至るまで自分のいのちを差し出したという出来事」（GE, 5）を通して、これを示しました。同時に、名もない聖性があります。祭壇の榮譽を受けていない人々、「必ずしも彼らの人生は非の打ちどころのないものではなかったかもしれませんが。それでも彼らは、過ちや失敗をおかしても前向きであり続ける、主の心にかなう者」（GE, 3）、その人々の聖性です。これは私たちの母や祖母、そのほか身近な人々の聖性です；愛における成長の美しい道を歩む夫婦の聖性；親として成長し、円熟し、しばしば隠れたまま知られることのない犠牲をささげながら、自らを惜しみなく子どもたちに与える父親たちの聖性です。

⁶ フランシスコ・サレジオ『信心生活入門』1,3.

教皇は思い起こします。家族の生活を支えるために一生懸命に働く男性、女性たち。穏やかな心で、信仰の精神をもって、苦しむイエスとの一致の交わりのうちに病を担う人；人生をささげきり、微笑みも、希望も決して失わない高齢の修道女……。 (GE, 7 参照)

確かに言えるのは、教会の歴史のあらゆる時代、世界のあらゆるところに実に多様な人柄の、あらゆる年齢、あらゆる人生の状況に置かれた聖人たちがかつていて、今もいるということです。

教皇ベネディクト十六世は、自らの体験について語りながら、このことをとても良く言い表しました。「私にとって、自分が愛し、よく知り、“交通標識”、道しるべとなっているのは、偉大な聖人たちだけではないということを付け加えたいと思います。普段の小さな聖人、つまり、自分の人生の中で見てきた善良な人々、決して列聖されることのない人々もそうです。この人々は普通の人たちで、英雄的な際立ったしるしは見られないと言えるかもしれませんが、その日常的な善良さのうちに、私は信仰の真理を見るのです。」⁷

確かに、実に多くの人がこのようにキリスト者の道を生活に受肉させてきたことがわかります。ある人たちは“小さく”、ほかの人たちは“大きく”見えるかもしれませんが、皆が魅力的な、心を奪うような旅を歩んだのです。

教皇ベネディクトは、非常に価値ある言葉でカテケージスを結んでいます。それは、今年のスtrenナのメッセージを見事に要約していると私は思います：「愛する友人の皆さん、この光に照らして見るとき、キリスト者の召命は何と偉大で美しく、しかし単純なものでもあるのでしょうか！ 私たちは皆、聖なる者になるよう呼ばれています；それが、キリスト者の生きる道なのです。」⁸

ナザレのマリア：聖性の道を照らす類ない光

これらの小さく単純な、しばしば無名の聖性の道は、仰ぎ、心に思いめぐらすべき模範を常に与えられています。キリスト者の聖性は、神の子である主の母、ナザレのマリアのうちに、最も美しく、最も近い模範をいただいています。

マリアは、神のみ旨に余すところなく全面的に、「私はここにおります」と応える女性です。「お言葉どおり、この身に成りますように」（ルカ 1・38）と、「はい」と応えられたマリアは、信仰において「成りますように」が意味するすべてによって、余すところのない深い幸いのうちにおられます。御子が父の使命を行うため家を離れ、別れ別れになったときだけでなく、御子の十字架と死の悲しみを体験された最後の時も、そうでした。母親が体験するには酷い悲しみです。

主の母、マリアのうちに、あらゆる瞬間に神の計画を受け入れた生き方、神に絶えず「私はここにおります」と応えた人生の豊かさを、私たちは見いだします。この観点からマリアを観想し、人間存在の価値について、その余すところのない意味を、永遠という文脈の中で黙想することは、何と心を魅了することでしょうか！

⁷ ベネディクト十六世, 2011 年 4 月 13 日一般謁見のカテケージス: [Teachings VII (2011), 451].

⁸ 同. 450.

神の神秘的な計画を、勇気をもって受け入れたマリアは、すべての信じる人の母、神のみことばに耳を傾け、受け入れるための模範、聖性に向かう道の誤りのない導き手となります。それは、神だけが私たちの人生を価値あるすばらしいものにできるとマリアが教えてくださるからです。「神が偉大な方であるとき、はじめて人間は偉大なものになります。私たちはマリアと共に、このことを理解しはじめなければなりません。私たちは神から離れてはならず、神が共におられるようにしなければなりません；私たちの人生において、神が大いなる方であるようにしなければなりません。私たちもまた神聖なものとなるように；神の尊厳のあらゆる輝きが、そのとき私たちのものとなるでしょう」⁹。

以上のすべての理由から、私たちの母マリアに頼ることなく、キリスト者が聖性の道をたどることは考えられません。マリアを観想することは、信じること、希望すること、愛することを学ぶことです。そしてマリアに手を取られ、マリアのように、マリアと共に祈るなら、私たちは日々の旅路の中で、神からのみ来るあのなぐさめを確かに体験するでしょう。さらに、神の子の母であるマリアを呼び求めることによって、私たちの心は、御子の母、子どもたちの母としてのマリアの取りなしの賜物に開かれるでしょう。¹⁰

サレジオの感性をもって……

したがって、聖人になるなら、私たちはすべてを所有すると言えるでしょう。聖なる者にならないならすべてを失います。目標である聖性、そして聖人になるようにというたゆみない、心を揺さぶる招きもドン・ボスコの大いなるメッセージでもあり、この軸を中心に、ドン・ボスコの霊的提案全体と生涯のあかしがあったのです。

このドン・ボスコの聖性は、単純さ、友情の温かさと同時に元気な活力があり、人々に伝わり、伝染する力があります。「何とかして神のものにならなければならぬし、なりたいたいです。そして聖人になりたいし、そうでなければ幸せになれません」¹¹ というドメニコ・サヴィオの言葉には、ドン・ボスコがドメニコに伝えることのできた事柄のすべてでなく、多くが含まれています。この言葉は、ある説教で励ましと挑戦に満ちた次の言葉を聞いた後に、ドメニコが語ったものでした。「皆が聖人になることが神のみ旨であること。聖人になることは簡単だということ。聖人になる人には、天において大きな報いが用意されていること」¹²。この説教がドメニコ・サヴィオの心に神への愛の炎を燃え立たせる火花になったと、ドン・ボスコ自身、続けて書いています。

ドメニコの苦行への望みを抑え、むしろ祈りの生活、勉強、務めを良く果たすことに忠実に励み、余暇の遊びに（また生活の中の人間関係全体にも、とすることが出来ます）打ち込

⁹ ベネディクト十六世、2005年8月15日、聖母の被昇天の祭日のミサ説教。

¹⁰ この「マリア的な歩み」の継続として、私たちは2019年11月7日から10日にかけて、ブエノスアイレスで、第8回扶助者聖マリア国際大会を開催します。大会のテーマは「信じた方、マリア」です。

¹¹ J. BOSCO, Vita del giovanetto Savio Domenico allievo dell'Oratorio di S. Francesco di Sales con appendice sulle grazie ottenute per sua intercessione, Ed. 5, Torino, Tipografia e Libreria Salesiana 1878 in ISS, Fonti Salesiane. 1. Don Bosco e la sua opera. Raccolta antologica, LAS, Roma 2014; 『オラトリオの少年たち - ドメニコ・サヴィオ、ミケーレ・マコーネ、フランチェスコ・ベズッコの生涯』第1部、聖フランシスコ・サレジオのオラトリオの生徒、ドメニコ・サヴィオ少年の生涯, p.50, ドン・ボスコ社。[英語版]ISS, Salesian Sources. 1. Don Bosco and his work. Collected works, LAS, Rome 2014, 1187. 引用した箇所全体はこうなっています：「ある日、言葉の語源について勉強していたときのことで。彼は尋ねました。『“ドメニコ”とはどういう意味ですか？』答えは次のとおりでした。『“ドメニコ”とは、神のもの、という意味だよ。』『ほら、やっぱり』。彼は言いました。『ぼくを聖人にしてくださいと神父様に願うのは正しいでしょう？ ぼくの名前さえ、神のものという意味なんだから。何とかして神のものにならなければならぬし、なりたいたいです。そして聖人になりたいし、そうでなければ幸せになれません。』」

¹² 同, p.49; [英語版]1186

むことを勧めたドン・ボスコの教育的、霊的な知恵には、聖性への普遍的招きの典型的なサレジオの意識が表れています。

聖フランシスコ・サレジオ修道会の創立、そしてその後の扶助者聖母修道女会／サレジオン・シスターズの創立（共同創立者マリア＝ドメニカ・マザレロと共に）に当たり、ドン・ボスコは、今日にまで至るその第一の目的として、会員の聖化を掲げました。¹³

その後まもなく、ルア神父は次の言葉で勧めを与え、サレジオ会員に思い起こさせました：「これは、我らが愛するドン・ボスコが聖なる会憲の第一条で教えたことです。そこにはこのようにあります。私たちの会の目的は第一に、会員のキリスト者としての完徳であり、次に、青少年を霊的、物的に助けるさまざまな愛徳の事業である。」¹⁴ この目的がなければ、青少年のための使徒的な働き全体は何の実りももたらさないでしょう。他者を助ける第一の、最も徹底的、決定的な、唯一とさえ言える方法は聖人になることであると、ドン・ボスコはよくわかっていたのです。

この「新しく魅力的な、使徒的霊性の学び舎」¹⁵で、ドン・ボスコは独自の教育的、司牧的観点から福音を読み取りました。それは「本質的に、キリスト者の聖性の一般的な諸要素の、スタイルにおいて新しく均衡の取れた、調和ある有機的な統合を意味します。そこでは徳と聖性の手段が、それぞれの特徴的な位置、配分、均整と美しさを備えていました。」¹⁶

II. イエスと幸い

聖性の招きはすべてのキリスト者に差し出されています。聖性は、いのちの満ち満ちた豊かさであり、幸せ、祝福された幸いと同義語であるからです。それは、キリスト者として、私たちがイエス・キリストに従うときに見いだす幸せです。

これから語る言葉は若者にあてたものです。若者のための言葉ですが、「聖なる者になるう」という呼びかけがすべての人に関わっているということを私たちはよくわかっています：若者、教育者、父親や母親、信徒、奉獻生活者、男女修道者、司祭の皆に。端的に言うと、この言葉は、私たちサレジオ家族のメンバー一人ひとり、全員に呼びかけるものです。私たち皆がそこに含まれていると感じなければなりません。そして当然、これは神の民のすべての人に関わることです。

教皇ヨハネ・パウロ二世、ベネディクト十六世、フランシスコが大いなる確信をもって若者に送ったメッセージの数々は美しいものです。そのごく一部をここに挙げますが、そのすべてに共通するのは、幸せを保証してくださる方としてイエスを受け入れるという生き方に賭けるよう、若者に呼びかけていることです。

これは、聖ヨハネ・パウロ二世が世界の若者に語った際に指し示したことです：「皆さんが幸せを夢見るとき、実際、皆さんはイエスを探し求めているのです；ほかの何ものもあなたがたを満たしてくれないとき、イエスは皆さんを待っておられます；イエスは、皆さんを

¹³ 参照 サレジオ修道会会憲, 2, 25, 65, 105; FMA 会憲, 5, 46, 82

¹⁴ M. ルア, 私たちの靈魂、また私たちにゆだねられた人々の靈魂の聖化。アメリカ大陸の管区長および院長への総長書簡, ヴァルサリーチェ, 1894年9月24日

¹⁵ ヨハネ・パウロ二世, 教皇庁立サレジオ大学訪問時のあいさつ, 1981年1月31日, ロッセルヴァトーレ・ロマーノ紙, 1981年2月8日, [ASC 最高評議会報 300 (1981), 58].

¹⁶ E. ヴィガノ モルネーゼの精神の再発見 *Rediscovering the spirit of Mornese* ASC 301 (1981) 25

強く惹きつける美です；周りに合わせて流されることを許さない徹底した生き方へのあの渴きを皆さんのうちに目覚めさせるのは、イエスです；生き方をゆがめる偽りの仮面を棄てるよう皆さんを促すのはイエスです；皆さんの心にある最も真実な選択、ほかの人々がかき消そうとするその選択を読み取っておられるのはイエスです。皆さんのうちに、人生において何か大いなることを果たしたいという望み、理想を追い求める意志、生ぬるい凡庸さに安住してしまうことを良しとしない気概、自分自身や社会をより良いものにするため、世界をより人間らしい、より兄弟愛の息づくものとするため、謙虚に、忍耐をもって献身する勇気を目覚めさせるのは、イエスです。」¹⁷

教皇ベネディクト十六世も、これに劣らず明確な言葉で若者に語りかけました：「愛する若者の皆さん、皆さんが探し求めている幸せ、皆さんが味わう権利のある幸せには名前と顔があります：それはナザレのイエス、ご聖体のうちに隠れておられる方です。 […] このことを全面的に確信してください：キリストは、あなたがたのうちにある美しく素晴らしいものを何も奪われません、神の栄光のため、人々の幸せのため、世の救いのために、キリストはすべてを完成されるのです。 […] キリストに驚かされてください！ これからの日々、キリストに“発言の自由”をさしあげましょう！」¹⁸

そして教皇フランシスコは、幸せは妥協の産物ではないと若者に語りました。揺るがない実のあるものとして幸せが保証されず、“少量ずつ”消費されるもの、過ぎ去る一時的なものとしてとらえられ、その結果、真の幸せでも、本物の満足をもたらす人間的な道でもなくなってしまいうレベルにまで、期待が引き下げられることがあってはならないと：「皆さんの幸せに値段はついていません。それは妥協の産物でもありません；幸せはスマホにダウンロードできるアプリでもありません。」¹⁹

ドン・ボスコは、少年たちがこの世の人生で、そして永遠に幸せであることを願った

1884年5月10日付の「ローマからの手紙」の冒頭で、ドン・ボスコは少年たちに次のように書いています：「私の望みは、ただ一つです — あなたたちがこの世でも永遠の世界でも、いつも幸せであるように」²⁰。

地上の生涯の終わりに語られたこの言葉は、あらゆる時代の全世界の若者へのドン・ボスコのメッセージの核心を伝えていています。幸せであるように。今日も明日も、そしていつの時代も、すべての若者が夢に抱く目標として、ドン・ボスコはそれを望みます。しかし、それにとどまりません。「永遠の世界でも」は、イエスとイエスが指し示す幸せ、すなわち聖なる生き方だけが差し出すことのできる、さらなるものです。それは、若者一人ひとりの心に燃える「永遠」への深い渴きに答えるものです。この世、あらゆる社会は、この「永遠」も永遠の幸せも指し示すことができません。しかし、神は指し示すことができになります。

ドン・ボスコにとって、このすべては非常にはっきりしていました。そしてドン・ボスコは少年たちの心に、聖人になりたい、神のために生き、天国にたどり着きたいという強い望みを種蒔くことができました：「ドン・ボスコは、単純で安らかな、喜びあふれる聖性の道

¹⁷ ヨハネ・パウロ二世, 第15回世界青年の日ローマ大会, 祈りの夕べ, 2000年8月19日, Tor Vergataにて.

¹⁸ ベネディクト十六世, 第17回世界青年の日ケルン大会, 歓迎式典, 2005年8月18日.

¹⁹ フランシスコ, 子ども大会のミサ, 2016年4月24日, ローマ.

²⁰ サレジオ会『会憲会則』ドン・ボスコ著作選集, ローマからの手紙.

をたどるよう若者を導きました。その歩みは、遊び、真剣な勉強、一貫した責任感を、一つの生活の体験に統合するものでした。」²¹

III. 若者のために、若者と共にある聖人たち

サレジオのカリスマに特徴的な聖性は、奉獻生活者、信徒、皆のための場のあるものですが、青少年の聖性との関連において固有の表現を見ます。私の前任者パスクアーレ・チャーベス神父は奉仕職の初めの書簡『親愛なるサレジオ会員の皆さん、聖人でありなさい！』に次のように書いています。「若者たち自身が、『毎日の体験の中で、少年の発達の典型的要求にかなった、新しいタイプの聖性を生み出すことにおいて、ドン・ボスコに手を貸した。こうして、若者たちは、ある意味で同時に弟子であるとともに師でもあった』（第23回総会文書, 159）のです。私たちの聖性は、若者のためであると同時に、若者と共に歩む聖性なのです。なぜなら、聖性の探求において、『サレジオ会員と若者は、手を取り合って歩む』（第25回総会文書, 145）からです。彼らと共に自らを聖化し、彼らと共にあって一緒に歩み学ぶか、あるいは全く聖人にならないか、どちらかなのです。」²² 私たち家族の真のサレジオの心は、若者と出会うために自らが聖なるものにならないと知っています。しかし、若者たちのただ中で、若者と共にあるときこそ、さらに徹底的に自らを聖化できることを忘れません。

この望みは、私たちサレジオ家族を構成する31の会に、ほとんど一様に当てはめることができます。大いに興味を抱いて、私はサレジオ家族のさまざまな修道会の会憲会則、サレジアニ・コオペラトリー「使徒的生活のプロジェクト」、私たちのカリスマの大きな木を形づくるすべての会の計画、会則、規約（それぞれの呼び名にしたがって）の中で、聖性について述べている個所を見てみました。皆さんに確かに言えるのは、そのすべては何らかの形で、一人ひとりが人生において聖性に達するために、私たちが会として生まれて来た目的、意味として聖性をとらえていることです。したがってそれは、メンバー一人ひとりに示される聖性であり、他者と共に取り組む使徒職の目的としての聖性です。

青少年期 — 聖なる歩みの時

「聖性は、教会の最高に美しい顔」（GE, 9）であることを確信し、これを若者に指し示す以前に、私たちは聖性を生き、あかしするように呼ばれています。そのようにして、さまざまな場面で使徒言行録が伝えるように「民衆全体から好意をもたれる」共同体となります（GE, 93 参照）。この一貫性のある生き方をすることによってはじめて、聖性の道を若者と共に歩む同伴は意味のあるものになります。

聖アンブロジーオは「どの年代も聖性の円熟期である」²³と宣言しました。疑う余地なく、若者も聖性を生きることができます！ 多くの年若い人々の聖性のうちに、一人ひとりの道を先回りして守り、共に歩む神の恵みを、聖体とゆるしの秘跡の教育的価値、信仰と愛徳のうちに共にされる歩みの実り豊かさ、キリストの弟子、福音の宣教者であることをしばしば

²¹ J. E. Vecchi フアン・ベッキ *Andate oltre. Temi di spiritualità giovanile*, Elle Di Ci, Leumann (TO) 2002.

²² パスクアーレ・チャーベス, 「親愛なるサレジオ会員の皆さん、聖人でありなさい！」最高評議会報 379 (2002), サレジアニタ第58号, p.29-30

²³ 聖アンブロジーオ, *De Virginitate*, 40.

自らの血をもってあかしたこの勇士たちの預言的影響力を、教会は認めます。今日の若者が最も求める言葉は、**真実な生き方のあかし**です。そのため、若い聖人たちの生き方は、教会の**真実な言葉**です。そして、**聖なる生き方**を始めようという招きは、今日の若者が最も必要とする招きです。真の霊的な活力と実り豊かな**聖性の教育**は、若者の深い願いを裏切りません。すなわち、生きること、愛、成長、幸せ、自由、未来、満ち満ちた豊かさ、そして、あわれみと和解を必要とする深い願いです。

もちろん、この呼びかけは大いなる挑戦です。一方で魅力的ですが、他方では恐れや優柔不断の態度を起こさせるでしょう。「平凡で風味に乏しい、曖昧なものにとどまる」(GE, 1)、「ただ何とか毎日をこなす」ことに終始する誘惑を乗り越えることを含みます。なぜなら**聖性の挑戦**は日常生活と別のものではなく、まさにその同じ日常的な実存を、非凡に生きることであり、その日常は、神の恵みによって美しいものとなります。実に、**聖霊の実**は喜びと愛のうちに生きる生活であり、それが**聖性**なのです。その意味で、**教皇が例として紹介する**、長年にわたって獄中で暮らしたフランシスコ・ザベリオ・グエン・バン・トゥアン枢機卿の生きたあかしの模範は美しいものです。トゥアン枢機卿は、解放される時を待ちながら無為に日々を費やすことをよしとせず、別の選択をしました：「今というこの瞬間を生き、そして、それを愛で満たそう […] 平凡な仕事を非凡に果たすために、毎日訪れる機会を活かそう。」(GE, 17)

若い聖人たち、聖人たちの青春期

「イエスは、人間的な利益や恩恵を一切期待することなく人生を全面的にささげよう、すべての弟子を招かれます。聖人たちはこの高度な要求を温順に受け入れ、十字架につけられ復活されたキリストに謙遜に従い始めます。教会は**聖性の空**を眺め、若い男性、女性、十代の若者、子どもの聖人、福者から成る、ますます大きく、明るくなっていく**聖座の連なり**を見ます。それは、初代キリスト者共同体の時代から、私たちの時代に至るまで絶えることのなかった若い**聖性**です。教会は、私たちの保護者としてこの若い聖人、福者に呼びかけるとき、彼らを、存在の助けとなる拠りどころとして若者に指し示すのです。」²⁴ 若者をテーマとする司教シノドスの準備の調査を含め、さまざまな調査で、若者自身、「抽象的な神学の話 [に比べ]」、「**生きた物語**」があると、より受け入れやすい²⁵と認め、聖人の生涯はとても参考になると考えています。したがって、若者の年齢や状況に合わせた形で聖人の生涯を紹介することは本当に大切です。

また、若者に、「若い聖人たち」と共に、「**聖人たちの青春期**」も示す必要があることを忘れないようにするといいいでしょう。聖人たちは皆、青春期を経験しました。聖人たちがどのように青春期を生きたかを知ることは、今日の若者にとって有用でしょう。そのようにして、今日の若者たちは、簡単でも楽でもないさまざまな青春期の状況があったこと、そこに神がおられ、神秘的に働いておられたことを発見するでしょう。神の恵みが複雑な形で働き、時の経過の中で成熟する**聖性**を、忍耐強く、数多くの予期せぬ道を通して作り上げることを示すことで、常に可能である**聖性への希望**を培うよう、例外なくすべての若者を助けることができます。

²⁴ 第15回世界代表司教会議シノドス通常総会、若者、信仰、そして召命の識別。準備文書, LEV, 2014年ローマ, 214.

²⁵ 第15回世界代表司教会議シノドス通常総会、若者、信仰、そして召命の識別 - に先立つプレ・シノドス若者の集い (2018年3月19-24日) 最終文書, 第二部序文

シノドスの最終文書、最終項は、私たちが述べてきたことに一致し、若者の聖性も教会の一部であると宣言しています。「若者は教会の一部なのです。したがって、若者の聖性も教会の一部です。その聖性はこの数十年、世界のあらゆる所で幾重にも花を咲かせています：シノドス期間中、福音に忠実に留まるためにいのちさえささげた、実に多くの若者の生きた尊さを観想、黙想し、私たちは大きな感動を覚えました；シノドスに参加した若者たちのあかしの耳を傾け、力づけられました。この若者たちは、迫害のさなか、主イエスの受難にあずかることを選んだのです。若者の聖性を通して、教会は霊的熱意と使徒的活力を新たにすることができます。」²⁶

IV. 「聖なる者になろう」とは？

教皇フランシスコは単純に、直截に語っています。

聖人になるのに、司教、司祭、修道者である必要はないと述べ、次のように続けます：
「それぞれが置かれている場で、日常の雑務を通して、愛をもって生き、自分に固有のあかしを示すことで聖なる者となるよう、わたしたち皆が呼ばれているのです。あなたは奉獻生活に召し出されたのですか。喜びをもって自分の献身を生きること、聖なる者となりなさい。既婚者ですか。キリストが教会にされたように、あなたの夫、あなたの妻を愛し大切にすることで聖なる者となりなさい。あなたは労働者ですか。兄弟姉妹に仕える自分の仕事を誠意と能力を尽くして果たすことで、聖なる者となりなさい。あなたは子や孫をもつ身ですか。イエスに従うことを幼い子どもに根気強く教えることで、聖なる者となりなさい。あなたは権限ある立場の人ですか。共通善のために闘い、己の利益を顧みずに務めることで、聖なる者となりなさい。」 (GE, 14)

このことは、この大いなる挑戦を単純な普通の言葉で語るよう私たちに勧めます。それはあらゆる年齢、人生のあらゆる段階にある私たち皆一人ひとりにとって価値ある「挑戦状」です。

では、聖性とは何でしょう。若者にとって、現代の女性、男性にとって身近な、達成できるものであるこの聖性とは？

→ 聖性とは、身近で、現実の、具体的、可能なものです。実に、第二バチカン公会議が確認するように（教会憲章, 11）、聖性は**根本的な愛の召命**に関わります。人にとって、この聖性の呼びかけの魂、神髄は、余すところなく生きられる愛であると：「神は愛です。愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってください」（1ヨハネ 4・16）。

→ **洗礼の恵み**を实らせることです。神が私たちに**過大な要求をされるかもしれないと恐れることなく**：「あなたの洗礼の恵みを、聖性の歩みの上に実らせなさい。すべてを神に向けて開いておきなさい。そのために、ただひたすらに神を選び、幾度も幾度も神を選びなさい。」 (GE, 15)

それは聖霊のうちに生きること、毎日の普通の生活において、聖霊に導いていただくことです。高きを目指し、神に自分をゆだね、神ご自身によって愛され、解放されることを恐れずに。

²⁶第15回世界代表司教会議シノドス通常総会, 若者、信仰、そして召命の識別. 最終文書, LEV, 2018年ローマ, 167

教皇ベネディクト十六世はすべての若者に呼びかけました。「聖霊の働きに心を開いてください。聖霊は私たちのいのち・生活を変容させ、私たちをも、神が歴史の中で作り上げておられる聖性の大きいなるモザイクの小さな一部分としてくださいます。キリストのみ顔が、その余すところのない輝きを放つことができるように。私たちは高きを、神の高みを目指すことを恐れませんが、神が私たちに過大な要求をされるなどと恐れませんが。」²⁷

→喜びあふれる聖人になること。それが私たちへの神の“夢”であるから。

「[聖なる人は]臆病で、悲しげで、無愛想で、沈んだ心とも、生き生きした表情のない顔とも違います。聖なる人とは、喜びと、ユーモアのセンスをもって生きることのできる人です。現実立脚することを忘れず、前向きな希望ある心で人々を照らします。」(GE, 122) ジョヴァンニ・ボスコは若い頃、「喜びの会」を作り、またドメニコ・サヴィオは、オラトリオに新たに入って来た少年たちに言いました：「ここオラトリオでは、聖なる生き方とは、とても快活であることなんだ」²⁸ (それは表面的な喜びではなく、心の深みに、内的生活に、人生を前にして、神ご自身を前にしての責任感のうちにしっかり根ざした喜びであったと私たちは知っています)。

責任ある献身と喜びは一つに結ばれ、聖性と喜びは切り離せないということをドン・ボスコはよく理解し、このことを少年たちに伝授することができました。それは、喜びの聖性への、聖なる生き方のうちに生きられる喜びへの招き、呼びかけです。このことは、聖性の道を歩むために勇気が求められることを無視するものではありません。聖性の道は、結局は、「潮流に逆らう」歩み、反対を受けるに至ることも少なくない道、「反対を受けるしるし」、イエスのようにならなければならないこともある道だからです。

→ それは旅路、聖性の旅路であり、十字架の次元を伴います。

教皇フランシスコは、堅忍し、一貫して良いことを行うには内面の堅固さが必要であることを思い起させます；目覚めていなければならないことを思い起こします：「自分の中にある攻撃的で利己的な傾きと闘い、そうした傾向が根づかないよう用心しなければなりません。」(EG, 114)；教皇は、恐れに支配されないために、*parrhesia* 恐れずに真理を語る福音な自由を持つよう勧めます；何よりも、恵みと自由の源である、十字架につけられた方を観想することをやめないようにと、私たちを招きます：「キリストを目の前にしてもなお、いやされることも、変えられることもないならば、主のはらわたの中に、主の傷の中に入りなさい。神のいつくしみは、まさにその場所に宿っているからです。」(EG, 151)

今日、私たちは、十字架について語ることがあまりないかもしれませんが。しかし確かに、この点についても私たちは変わらなければなりません。十字架無しに、本物のキリスト者として生活し、日常生活で聖性の道を歩むことは不可能です。

シノドス期間中、聖パウロ六世ほか6人の聖人の列聖式にあずかり、私はパウロ六世のこの言葉が非常に的を射ていると感じています：「十字架が無ければ、イエスの苦しみ、犠牲がなければ、そのような福音は、すなわちキリスト教信仰はいったい何になるのでしょうか。私たちにとって絶対的に必要な、あがない、救いの無い福音、キリスト教信仰となるでしょう。主は十字架によって私たちを救ってくださった；ご自分の死によって、私たちに希望を、いのちの権利を取り戻してくださった……十字架を担うこと！ それは大いなることです、愛する子どもたち、それは大いなることなのです！ それは軟弱さや卑劣さに陥ることなく、

²⁷ ベネディクト十六世, 2011年4月13日, 一般謁見のカテケーシス: *Insegnamenti VII* (2011).

²⁸ メモリエ・ビオグラフィケ V, 228.

勇気をもって人生に向かうことです；私たちが生きるかぎり避けられないさまざまな困難を、道義的なエネルギーに変容させることです；人間の苦しみを理解しようとする、そして最終的に、真に愛そうとすることです！」²⁹

→ **聖性を、私たちの務めや、関心事、愛情を遮るものとしてではなく、すべてを愛のうちに受けとめることとして生きる**ことです。聖性は愛の完成であり、そのため、人間の根本的な必要に応えるものです：愛され、愛する必要があります。男性、女性が聖なる者であればあるほど、ますます人間らしくなります。なぜなら、「人生に使命があるのではなく、人生が使命である」（GE, 27）からです。

したがって、**聖性は、より人間らしくなる歩み**です。「わたしたちに必要な聖性の精神は、独りになることも勤労も、内的生活も福音化の任務も、どちらも含まれるもので、それによってすべての瞬間が、主の目には、献身的愛の表現となります。そうして瞬間瞬間は、聖性に向かうわたしたちの歩みの一歩一歩となるのです。」（GE, 31）

ですから**聖性は、人間であることが余すところなく花開くことと一致**します。人間として持つ条件や置かれた状況から切り離すような、非人間化、非具体化させる歩みを提示するものではありません。かえって、人間性そのものを、兄弟姉妹の人間性を、ますます全人的に、そして真実に体験する生き方です。人は真の聖人の前で、その男性、女性がどのような人であるか、その人の愛情、意志、人との関わり方、知性など、あらゆる特徴をもって、非常にはっきり認識することができます：「私たちは聖人を通して次のことを知ることができます。神のもとに行った人は、人々から離れてしまうのではなく、むしろ、真の意味で人々の近くにいるようになるのだということです。」³⁰

解説の終わりのほうで、私たちサレジオ家族の聖人、福者、神の僕、尊者について話しましょう。そのときこのことを思い出そう、ここで皆さんを招きます。この人々がその生涯をもって私たちに差し出してくれる尊いあかしに目を向けながら。

ドン・ボスコ自身、大いなる人間味にあふれていましたが、オラトリオにやって来る少年たちを最初に見つけ、いやし、人生の和解を得させました。少年たちはしばしば、愛情の乏しさ、経済的な困難、親を亡くしたり、見捨てられたりといった難しい状況をくぐりぬけてきていたのです。ドン・ボスコは、少年たちをいやすことに役立つ、霊的なものでもあるすばらしい雰囲気の中で、家庭的精神と予防教育法のあらゆる豊かさを彼らに差し出しました。ドン・ボスコ自身の父のような愛、喜びあふれる家庭的雰囲気、ドン・ボスコによって導かれた信仰の歩みとイエスとの友情によって、少年たちの傷はいやされました。

マドレ・マザレロと最初のシスターたちはモルネーゼで、扶助者聖マリア修道女会の最初の家を受け入れられた貧しい少女や若い女性たちの人生の状況を共にするため、女性特有の感性をもって生きました。

このようにして、サレジオ家族の実に多くの会において、私たちの歴史は典型的な特徴、生き方をもって繰り返されてきました。福音の特徴でもあるこの生き方により、私たちは、出会う一人ひとりの人の人間性を世話し、いやすことができました。

→ **務めであると同時に賜物でもある**（すなわち、召命、責任、献身する取り組み、賜物である）**聖性**。聖性は神のいのちにあずかることであり、人がもっぱら自分の力に頼って

²⁹ パウロ六世, 1967年3月24日, 十字架の道行の講話。

³⁰ ベネディクト十六世, 回勅『神は愛 *Deus caritas est*』LEV, Rome 2005, 42。

到達できるとする、主意主義的、あるいは道徳的観点から見た完全さではありません。実際、聖なる生き方は、主として私たち自身の努力や行いの結果ではなく、三度聖なると唱えられる神（イザヤ 6・3 参照）の働きによるのです。神は私たちを聖なる者とし、私たちに、内側からその力と意志を与えてくださるのです。

聖性は献身する取り組みであり、責任です。自分にしかできないことです：「あなたの人生を用いて神が世に伝えたいと望まれるそのことば、そのイエスのメッセージが何であるか、それに気づくことができますように。」（GE, 24. 本文書訳者による訳）

サレジオ家族の奉献された人々にとって、この務めは欠かせないものになります。パウロ六世は、実に徹底した言葉でこのことを述べています：「修道生活は聖なる生活でなければなりません。そうでなければ、そもそも存在する理由がありません。」³¹

V. 聖性の指標として考えられるもの

一人ひとりにとって、そして私たちの使命にとって有効であるかもしれないいくつかの点をここに提案したいと思います。

* 神に出会う場として、“日常生活”を生きる

カリスマをいただいた家族として私たちを際立たせるサレジオの心は、生活を、前向きな信仰をもってとらえ、日々、神に出会う場としてとらえるという特徴があります。そのような場は、人間的絆、仕事、喜び、余暇のくつろいだ時間、家庭生活、個人の能力の開発、与えること、奉仕……などに満ちた現実を通り、すべては神の光の中で生きられます。このことは、ドン・ボスコ自身から来る非常にサレジオ的な確信として、具体的な、単純な言葉で言い表されます：聖人になるには、自分がすべきことを良く行うことである。

日常生活の聖性が、ここに提示されています。アビラの聖テレジアは、“炊事場”に聖性を見だし、フランシスコ・サレジオは、キリスト者が生活の務めや悩みのただ中で、この世で生きながら聖人になれることを示そうとし、ドン・ボスコは、喜びの単純さのうちに、務めを果たし主への愛のためにすべてを生きる本物の聖性の学び舎を、少年たちと共にヴァルドッコに創り上げたのです。

* 祈る人、祈る共同体になる

聖性は、私たちが若者に差し出すことのできる最高の贈りものであり、さらに言うなら、今日、若者、子ども、その家族は、私たちの生き方のあかしを必要としています。また先に述べたように、この単純で飾らない聖性は私たちが差し出すことのできる最も価値ある贈りものになります。

しかしながら、深みのある生き方を培わなければ、本当の信仰、その信仰の表れとしての祈りがなければ、この道をたどることはできません。教皇フランシスコは述べます：「祈りのない聖性をわたしは信じていません。」（GE, 147）次のことは、主イエスとの親密さがなければ、いずれも不可能です：感謝の記憶の表れである感謝の祈り；神に信頼する心の表

³¹ パウロ六世, 1965年6月27日のあいさつ, エジディオ・ヴィガノ「我々の聖性の歩みを共に再構築しよう」最高評議会報 303 (1981).

現である祈願、；兄弟愛の表現である取りなしの祈り；超越的な方として神を認めることの表れである礼拝の祈り；温順、従順な心の表れであるみことばの黙想の祈り；あらゆる聖性の道の源、頂点である聖体祭儀の祈り。

* 生活のうちに聖霊の現存の実を育てる

愛、愛徳、喜び、平和、忍耐、親切、善良さ、堅忍、柔和、節制などの実りです……聖性は争い、論争、妬み、分裂、性急さではありません。「聖性は、あなたの弱さと恵みの力の出会いなので、あなたから人間らしさを奪いはしません。」 (GE, 34)

* 徳を実践する

悪を退け、自分の善を守るだけでなく、善いことへの情熱を持つこと、善いこと、すべての善いことを良く行うこと……祈りと社会における行動、奉仕と自己贈与、また沈黙の時も意味します。家庭生活と仕事における責任感。「すべてのことは、この世におけるその人の存在の一部として受け入れられ組み込まれるものですし、聖性の歩みの一部となります。わたしたちは……自らの固有の使命を責任と寛大さをもって務めることで聖性をはぐくむようにと求められています。」 (GE, 26)

したがって、喜びのうちに一貫性をもって徳を実践しながら福音の言う善を生きることは、実に、単純で飾らない聖性の道になります。

* 交わりをあかす

聖性の道で体験は分かち合われ、聖性に向かう歩みは共同体の中で生きられ、目標は共に到達されます。聖人たちは常に仲間と共にいます。一人の聖人がいるところには、必ずほかの聖人もいます。日常の聖性は交わりを生き生きと育て、人間的絆を生み出します。私たちは共に聖人になるのです。孤立しながら聖人になることはできません、そして神は、孤立した私たちを救われるのではありません：「他者と隔絶した個として単独で救われる人などはおらず」、(GE,6) 聖性は人間的絆、親しさ、交わりによって養われます。なぜならキリスト教信仰の霊性は本質的に共同体的、教会的、豊かな多様性のあるものであり、エリート主義あるいは英雄主義の聖性の概念とは根本的に異なる、ほど遠いものであるからです。

それどころか、他者との交わりが忘れ去られているところ、他者の顔を探し求めることを忘れ、兄弟的絆、温かな愛が忘れられているところには、キリスト者の聖性はありません。

* すべての人の人生は使命であることを理解すること

教皇は、一人ひとりが自分の人生全体を使命としてとらえるよう招いています。人が人生の意味を問うとき、何のために存在しているのか、大きな困難や厳しい状況の中で、自分の人生は何のために、誰のために役に立っているのか、この世にどのような貢献ができるのかと問うとき、それは、自分の使命は何なのかという問いなのです。そしてこの観点に照らし、私たちは気づきます。「キリスト者は、地上での自分の使命を聖性の道と受け止めることなく、それについて考えることはできません。」 (GE, 19) この取り組みに、常に自分の最善を尽くしながら。

ヴァルドッコ、モルネーゼ、ヴァルサリーチェ、ニッツァ、イヴレア、サン・ジョヴァンニョなどのサレジオの家では、その初めから、友情と献身、奉仕のうちに大きく花開く、

共有される体験である聖性があかしされてきました（召命、使命として理解される人生と、今日、私たちは言うでしょう）。

*** 真福八端の（安易さではない）単純さを求める（GE, 70-91 参照）**

イエスは、真福八端を宣言することによって、聖性への真の道を私たちに差し出してくださいました。「真福八端はキリスト者の身分証のようなものです。」（GE, 63）

真福八端のうちに、生き方の道が提起されています。その中で、簡素な生活にも表れる心の貧しさから、あらゆることが原因となり容易に争いが生じるこの世で、謙遜な柔和をもって応えることまでを含むさまざまな歩みがたどられます。他者の悲しみに「刺し貫かれる」勇気を持ち、その人々に共感し、不正義、腐敗、権力の乱用によって手に入れる甘い汁をほかの人々が分け合う中、真の飢え渴きをもって正義を求めます。

真福八端は、いつくしみをもって見、そして行動するようキリスト者を導きます。それは他者を助け、またゆるすことです；神と隣人への愛を損なうあらゆるものから心を清く保つよう導きます。イエスが指し示されることは、平和と正義の種を蒔くよう、人々の間に橋を築くよう私たちに求めます。また、理解されないこと、身に覚えのない中傷を受けること、端的に言えば、今日存在する最も捉えにくいものを含め、あらゆる迫害を受けとめるよう、求めます。

*** 小さな行いを通して成長すること（GE, 16）**

これも、誰にでも手の届く、わかりやすく実際の指標の一つです。神は私たちを、小さな行い、ささやかな日常の事柄を通して聖性へと呼ばれます。そのような聖性を、私たちは確かに他者のうちに見いだし、また日常生活の中で自分自身のうちの実現させます；聖性の道が一つしかないわけでも、皆にとって同じわけでもないということによって、男性として、女性としての条件が聖性の道になるということによって、豊かにされながら。

この観点から、女性の心配り、細やかな心遣いや行動は、すべての人のための見事な模範です。そのため、教皇フランシスコは述べています：「『女性の才能』もまた、神の聖性をこの世に映すには不可欠な、女性ならではの聖性のあり方に表れるものだということを強調したいと思います。[...] わたしの関心は、知られることのなかった女性、また忘れ去られた多くの女性、それぞれ固有のしかたで、自らのあかしによって家族や共同体を支え、変えた人たちを思い起こすことにあるのです。」（GE, 12）

*** 高みへのぼるように創造された私たちにとって、すべてが役に立ちます
飛ぶのを拒否することを除いて！**

聖性の道をたどる助けとなる小さな歩みは、数多くあります。飾らない単純な、名もないキリスト者の聖性、しかし私たちの生活を美しく形づくる聖性です。先に述べたように、すべては私たちの役に立ちます；高みへのぼるために生まれて来た私たちにとって、飛ぶのを拒否すること以外のすべてが！ なぜなら私たちは「神に選ばれ、聖なる者とされ、愛されている」（コロサイ 3・12）からです。

私の言わんとすることは、マメルト・メナパセ³²によって、ある美しい物語の中で見事に表現されています。地上に留まるか、あるいは神へと、聖性、頂上、高みへと飛翔するか、その二者の間のジレンマを表す見事なたとえ話です。

物語は次のように語ります：

「昔々、ある農夫が高い山間の道をいつものように歩いていたところ、頂に近い岩の間に不思議な卵を見つけた。にわとりの卵にしては大きく、ダチョウの卵にしては小さかった。

何の卵かわからないまま、男はそれを持ち帰ることにした。

家に帰ると、男は卵を妻に手渡した。妻は、産んだばかりの卵を巣で温めている七面鳥を飼っていた。夫が山から持ち帰った卵が巣の中のほかの卵と似たり寄つたりの大きさだったので、妻は七面鳥のしっぽを持ち上げ、その下に卵を置いた。

ヒナたちが殻を破って出てき始め、山から来た卵のヒナも同じように殻を破って出てきた。山の卵のヒナは、ほかのヒナたちとは何か違う種類のものであったが、その違いは巣の中で大きく目立つほどではなかった。実は小さなコンドルだったのだが。七面鳥が温めてかえったヒナであったが、その出自は別にあった。

ほかのお手本がなかったので、小さなコンドルは七面鳥たちがしていることを見てまねをした。ほかのヒナたちと一緒に、大きな七面鳥の後について地中の虫や種、くずを探し歩いた。地面を掘り、飛びあがって灌木の熟した実をついばもうとした。にわとり小屋に住み、食べ物を盗みにたびたびやって来る犬におびえた。夜はイタチなどの捕食動物から身を守るため、いなごまめの枝にとまって眠った。コンドルのヒナは七面鳥たちがすることを見てまねをしながら、漫然と繰り返す日々に入り、生きていた。

時折、変な気分のすることがあった。特に独りでいることがあると。しかし、独りになることはあまりなかった。七面鳥たちは独りになることも、ほかの鳥が独りでいることも好まなかったのだ。七面鳥というものは、常に群で動き回ることを好み、相手に印象づけようと胸をふくらませ、尾を広げたり、羽をひきずったりする。何かが発発的に起こると、それは必ず、辛辣な嘲りの反応を引き起こすのだった。

七面鳥の特徴はこれである：体は大きい、飛ぶことがない。

ある真昼のこと、澄み渡った空高く白い雲が飛んでいた。何羽かの不思議な鳥が、ほとんど翼を動かさず、雄々しく飛んでいるのを見て、我らが小さな主人公は驚いた。自分の存在の奥底で、激しく衝き動かす何かを感じた。細胞の奥底から自分を目覚めさせようとする、昔の呼びかけのような何かだった。ヒナの目は、食べ物を探していつも地面を見ていることに慣れてしまい、空の高みで何が起きているのか、見分けることができなかったが、激しい郷愁に心は呼び覚まされた：自分もあのように飛べるのではないか？ 気が気でなく、心臓は高鳴った。

その時、一羽の七面鳥が近づいてきて、何をしているのと尋ねた。ヒナが事の次第を打ち明けると、七面鳥は笑った。お前はロマンチストだな、ばかげたことに現^{うつつ}を抜かすのはや

³² M. Menapace, Cuentos rodados, Patria Grande, Buenos Aires 1986 (サレジオ会訳)

めろ、と言った。自分たちは違うのだ。現実に戻るべきだ。たくさんの熟れた実といろいろな虫のいる所を見つけたから連れて行ってあげると七面鳥は誘った。

かわいそうなヒナは混乱しながらも、夢から覚め、仲間についてにわとり小屋へ帰った。

彼は再び元の生活に戻った。不思議な気持ちにさせる内奥の満ち足りない感覚に、常にさいなまれながら。

彼は、コンドルとしての真の自分を見いだすことはなかった。

ある日、彼は年を取って死んだ。そう、残念ながら彼は、それまで生きた憂鬱な日々の中、死を迎えた。

高みへのぼるために生まれてきたのに！ 》

これは聖性に向かうキリスト者の成長の道について語るものです：「神の高みを目指すことを、恐れないように；**神が過大な要求をされるなどと、恐れなくてください**」³³。

VI. 今日における聖性の道 - サレジオ家族の歴史に照らして

聖性の旅路にはさまざまな道があります。私たちは聖なる人々がいると知っていますが、誰がより聖いかは決して知りません。神だけが私たちの心をご存じなのであり、一人ひとりのうちにそれぞれの固有な美しさがあります。その人が差し出すことのできない、差し出す必要のないものを、その人に求めるべきではありません。このように言うことは、励ましと心の平安をもたらします。そうでなければ、聖人にはなれないと私たちは思いこむでしょう。模範として示される聖人と同じようには決してなれないからです。「実際そこにある以上の完全さを聖性に加える必要はありません」³⁴。つまり、キリスト者の英雄的な生き方は英雄主義ではなく、キリスト者の完徳はスーパーヒーローの完全さではありません。「私の父の家には住む所がたくさんある」（ヨハネ 14・2）。天の国は庭園のようです：小さなすみれもあれば、見事なゆりやバラもあります。人生のいかなる条件も、喜びといのちの満ち満ちた豊かさを阻む、乗り越えられない障害となることはありません。

私たちはドン・ボスコと共に、ドメニコ・サヴィオ、ジョヴァンニ・マッサーリア、フランチェスコ・ベズッコだけでなく、ミケーレ・マゴーネら問題を抱えた、また人生の物語に深い傷を刻まれた多くの少年たちにも出会います。

サレジオ会と扶助者聖母修道女会の初期の事業には本格的な孤児院があり、不正義の犠牲となったり心の傷を受けたり、さまざまな状況に置かれた少年少女（カルロ・ブラガ、ラウラ・ビクーニャ…）がいました。

時には、個人的な傷をもつ人々がいました：ベルトラミ、チャルトリスキーらは、病気のために普通のオラトリオの生活を送ることはできないと知っていました。アルテミデ・ザッティも、病のために司祭への道を阻まれました。フランチェスコ・コンヴェルティニは知的

³³ ベネディクト十六世, 2011年4月11日, 一般謁見でのカテキズム: Insegnamenti VII (2011).

³⁴ P. Catry, «Le tracce di Dio», in Aa. Vv., La missione ecclesiale di Adrienne von Speyr. Atti del 2° Colloquio Internazionale del pensiero cristiano, Jaca Book (= Già e non ancora), Milano 1986, 32 quoted in L. M. Zanet, La santità dimostrabile. Antropologia e prassi della canonizzazione, Dehoniane, Bologna 2016, 204.

賜物が非常にささやかで、その際立った聖性によってはじめて目上は司祭への道を歩みつけさせてよいと確信しました。アレキサンドリーナ・マリア・ダコスタは、進行性の麻痺のために寝たきりでした。ニーノ・バリエリも同じ状況で生涯を送りました。サレジオの神秘家、ヴェラ・グリタも、事故のけがにより、同様のカルワリオを生きました。

このように、家庭や個人の事情によりさまざまな形で傷ついた実に多様な人々が、**ドン・ボスコの家**に住む場所と温かい受容を見いだします。通常の規準、人間的な賢さや効率性に基づけば、決して受け入れられることのなかった人々です。表面的には、サレジオの精神の喜びあふれる、“たくましく” さえある快活さとは全く合わないように見える人々です。しかし信仰の光のもとで見ると、個人の置かれたいかなる状況も聖性の妨げにならないことを、具体的な事実を示しています。

* どの聖人も、受肉した神のみことば

同じ聖人は二人といません。聖人に倣うということは、そっくりまねすることではありません。どの人も、自分のリズムと時、自分の道が必要です。なぜなら「聖性の歩みが個人的なもの」³⁵であるからです。

聖性の星雲は広大で多様です：善へと向かう漠然とした方向づけとして平面化するのではなく、汲みつくすことのできないインスピレーション、展望の源泉としてとらえなければなりません。福音の生きた映しである聖人たちは、福音の最も真正な精神の解釈、神の聖者、イエス・キリストのみ顔を映し出す鏡となっています。慈愛と美しさの賜物を広め、つかの間の過ぎ去る流行に左右されることなく、常に若々しい心の推進力をもって愛の奇跡を可能にします。聖人たちは、恵みの力をもって世界を、そして教会を変えます。教会は聖人たちのあかしによってより福音的な、より信頼できるものとなります。

聖書の記者たちにインスピレーションを与えたその同じ聖霊が、福音のためにいのちをささげる力を聖人たちに与えます。聖人たちに見られる、聖性の「受肉」の多様な姿は、神のみことばの生き生きとした効果的な解釈学の確かな道となっています。

* 聖なる者になることは可能であると、サレジオ家族のすべての聖人は私たちに語る

一人ひとりの聖人、福者、尊者、神の僕は、さらに考察と評価を深めるにふさわしい豊かな要素の担い手です。それは、数々の面を持つダイヤモンドを観想するかのようです。より目にとまる魅力的な面があれば、すぐに目をひき共感を覚えさせることはなくても、だからといってより真実でない、あるいは影響力が弱いというわけではない面もあります。信仰者として類まれな模範となったこの人々について知り、人に伝えることは、彼らの歩みにますます関わっていくこと、その人生の体験に熱く関心を持つこと、彼らの歩みを導いた計画や希望を喜びのうちに共にすることへと至らせます。

いくつかの例を挙げましょう。

→ 「私たちの家で共に暮らした」若者の聖性

³⁵ ヨハネ・パウロ二世、使徒的書簡『新千年期の初めに *Novo Millennio Ineunte*』、ローマ 2001, 31.

ドメニコ・サヴィオ、ラウラ・ビクーニャ、セフェリーノ・ナムクラのあかしと共に、ボズナニのオラトリオの若いリーダーたち、アルベルト・マルヴェッリらのあかしを含め、サレジオ家族には29歳以下の若い聖人、福者が46名います。

特に、聖ドメニコ・サヴィオのあかしのいくつかの側面は特に注目に値します：

・単に教育学的、教育的な側面であるにとどまらず、神学的な事実でもある予防の側面。ドン・ボスコ自身が証言したように、ドメニコの生涯には予防的恵みが与えられ、その働きと顕現を見ることができます。³⁶

・初聖体の決定的な価値。³⁷

・ドメニコがリーダー、神の道における先生のような存在であること（ドン・ボスコが1876年のランゾの夢で見たように）。ドメニコの提案を自分のものとした、サレジオの多くの福者、尊者、神の僕らの生涯のうちに、このことを確認できます：ラウラ・ビクーニャ、セフェリーノ・ナムクラ、ヨセフ・コワルスキー、アルベルト・マルヴェッリ、ジュゼッペ・クアドリオ、オクタヴィオ・オルティス・アッリエタらです。

・後のサレジオ修道会の苗床となった無原罪聖母信心会の創設に、ジョヴァンニ・マッサーリアと共に果たしたドメニコの役割。ジョヴァンニは霊的事柄においてドメニコの真の友でした。ドン・ボスコはジョヴァンニについて次のように宣言しています：「マッサーリア少年のよい模範や徳について書くなら、サヴィオについて書いたことをほぼ繰り返すことになるでしょう。彼は生涯、ドメニコの模範に忠実に倣っていました。」³⁸

→ **サレジオのカリスマの宣教の聖性**は、多くの男性、女性、奉献生活者、信徒のうちに表れ、福音を宣べ伝えること、信仰の文化受容、女性の地位の向上、貧しい人々と先住民の権利の擁護、地方教会の創設、といった働きが際立ちます。英雄的徳と聖性の認定に向けて調査が行われている我々がサレジオ家族の兄弟姉妹のうちかなり多くが宣教師であることは、深い印象を与えます：福者マリア・ロメロ・メネセス, FMA；福者マリア・トロンカッティ, FMA、尊者ヴィンチェンツォ・チマッティなど。

→ 「いけにえ」の**奉献の聖性**。 *Da mihi animas, coetera tolle* の深い根源を表すもの。この霊的側面を生きた人々の先頭に立つのは尊者アンドレア・ベルトラミ（1870-1897）です。彼のあかしは、ある聖性の体験の範型となっています。その体験は、アンドレア・ベルトラミ、アウグスト・チャルトリスキー、ルイジ・ヴァリアラの3人組みに始まり、福者エウセビア・パロミーノ、福者アレキサンドリーナ・マリア・ダコスタ、福者ラウラ・ビクーニャ

³⁶ ドン・ボスコは振り返っています：「彼のうちに、私は主の霊に従う魂を見ました。そして、すでにその幼い少年のうちにいかに恩寵が働いているかを見て、非常に感嘆しました。」, J. BOSCO, *Vita del giovanetto Savio Domenico allievo dell'Oratorio di S. Francesco di Sales con appendice sulle grazie ottenute per sua intercessione*, Ed. 5, Torino, Tipografia e Libreria Salesiana 1878 in ISS, *Fonti Salesiane*. 1. Don Bosco e la sua opera. Raccolta antologica, LAS, Roma 2014, 1039. ; [英語]ISS, *Salesian Sources*. 1. Don Bosco and his work. Collected works, LAS, Rome 2014, Kristu Jyoti Publications 2017, *Life of the young Dominic Savio, pupil at the Oratory of St Francis de Sales*, 1179; 『オラトリオの少年たち - ドメニコ・サヴィオ、ミケーレ・マコーネ、フランチェスコ・ベズッコの生涯』第1部、聖フランシスコ・サレジオのオラトリオの生徒、ドメニコ・サヴィオ少年の生涯, p.37, ドン・ボスコ社。

³⁷ ドメニコ・サヴィオの生涯における霊的喜悅の時は聖体に結ばれているという特徴があり、初聖体の日にその恵みの時が見いだされます。それは種のようなものとして捉えられ、それを育むなら、喜びあふれる生活と真剣な献身の源泉となります：「それは彼にとって、忘れがたい日となりました。それは新しい始まり、もしくはどんなキリスト者にとっても模範となるような生き方の継続と言えるものでした。何年もあと、初聖体のことを尋ねられると、いまだによるこびで顔を輝かせて言うのでした。『ぼくの人生でいちばん素敵な、すばらしい日だった』。彼はある信心の本にいくつかの約束を書き留め、大切に保管し、しばしば読み返していました。[...] 1. 頻繁にゆるしの秘跡にあずかる。聴罪司祭が許可を与えるかぎり、毎回聖体拝領をする。2 日曜日と祝日を、聖化する。3. 多くの友達はイエス様とマリア様。4. 罪を犯すよりも死を。』この約束をドメニコはしばしば繰り返し唱えていて、それは亡くなるまで生涯ドメニコを導いた指標でした。」 (同, p23-24. [英語版]1171).

³⁸ 同, p.90. [英語版]1210.

といった偉大な存在の名を連ね、時代を通じて続きます。数多くの殉教者の群れも忘れてはなりません（例えば、スペイン内戦の95名の殉教者。その中には多くの養成中の会員、若い司祭がいました）。

→ **傷ついた家庭という側面**：少なくとも片親が不在の家庭。あるいは、母親、父親の存在がさまざまな理由（物理的、心理的、道徳的、霊的）から子どもにとって問題となる家庭。自らも幼くして父を亡くし、マンマ・マルゲリータの賢明な判断により家族と離れて暮らす辛い体験をしたドン・ボスコは、サレジオの事業が特に「貧しく、見捨てられた青少年」のためにささげられることを望みました。

・ 1891年にチリに生まれた福者**ラウラ・ビクーニャ**は父を知らずに育ち、母はアルゼンチンで裕福な地主マヌエル・モラと暮らし始めました。ラウラは正しい道を外れた母親の状況に苦しみ、母のためにいのちをささげました。

・ 神の僕**カルロ・ブラガ**は1889年にヴァルテッリーナ（北イタリア）に生まれました。カルロがまだ幼いころ父は家族を捨て、人々の無知や噂が原因で母は情緒不安定とされ、家を出されました。カルロは多くの屈辱を味わい、サレジオ会召命が本物であるか問題視される経験を何度もしましたが、これらの困難の中で和解の豊かな力が育まれ、深い父性と善良さを表すようになりました。特に兄弟会員の両親に対して。

→ **召命の側面**：ドン・ボスコ生誕200周年を祝う歩みの中、二人のサレジオ会員殉教者が列福されました。二人の生涯は、私たちのカリスマにおける、ただ一つのサレジオ会奉獻召命の二つの形を構成する、いくつかの側面を浮かび上がらせます。

・ **ステファン・サンドル**（1914-1953）は2013年に列福されました（列福調査は2006年に開始）。彼の存在は、ただ一つの奉獻されたサレジオ会召命の二つの形の相互補完性を思い起こさせます：修道士、そして司祭という二つの形です。サレジオ会修道士としてのステファン・サンドルの輝かしいあかしには、明確で決定的な召命の選択、模範的な生活、教育における高度な専門性、使徒職の実り豊かさが表れています。職人見習いの若者たちへの、また職業の世界への優先的な愛を伴う、サレジオ会修道士の召命と使命の姿を、私たちはそこに見ます

・ **ティトゥス・ゼマン**（1915-1969）は2017年9月30日、ブラチスラヴァで列福されました（列福調査は2010年に開始）。1950年4月、チェコスロバキアの共産政権が修道会を解散させ、男女修道者を強制収容所に送りはじめたとき、若いサレジオ会員が勉学を修めることができるよう、トリノへの秘かな脱出行が必要であるとの判断が下されました。ティトゥスはこの危険な任務を引き受け、20名ほどの若いサレジオ会員のために2度の脱出行を率いました。3度目のとき、ゼマン神父は脱出を図ったほかの会員と共に捕らえられました。過酷な裁判に耐えたゼマン神父は祖国を裏切ったバチカンのスパイと糾弾され、死刑宣告にも脅かされました。ゼマン神父は大いなる犠牲と奉獻の精神をもって苦難を受け入れました：「いのちを失うとしても、それが無駄になったとは思いません。私が助けた会員のうち少なくとも一人が、私の代わりに司祭になったと知っているのです。」

→ **サレジオの父性、母性の側面**：ドン・ボスコの大いなる父性に続き、私たちは中でも、聖マリア＝ドメニカ・マザレロ、福者ミケーレ・ルア、福者フィリッポ・リナルディ、福者ホセ・カラサンス、尊者マンマ・マルゲリータ、尊者ヴィンチェンツォ・チマッティ、尊者テレサ・ヴァルセ、尊者アウグスト・アッリバ、神の僕カルロ・ブラガ、神の僕アンジェイ・マチェンらを思い起こします。

→ **司教職の側面**：ドン・ボスコの学び舎で花開いた聖性の豊かな実りとして、少なくない数に上る司教たちもいます。司教たちは、司教職において、サレジオのカリスマに特徴的な牧者の愛を固有な形で具現しています：殉教者 聖ルイジ・ヴェルシリア（1873-1930）、尊者ルイジ・オリヴァレス（1873-1943）、創立者 尊者ステファノ・フェッランド（1895-1978）、尊者オクタヴィオ・オルティス・アッリエタ（1878-1958）、枢機卿 尊者アウギュスト・フロン（1881-1948）、神の僕アントニオ・デ・アルメイダ・ルストサ（1886-1974）、神の僕オレステ・マレンゴ（1906-1998）。

→ **カリスマにおける子の側面**。また非常に興味深いのは、人生のある時期をドン・ボスコと共にし、その聖性、使徒的・教育的実り豊かさを深く尊敬しながら、福音的自由をもってそれぞれの道をたどり、固有の洞察、貧しい人々への真の愛、摂理への限らない信頼をもって自ら創立者となった聖人たちをも、私たちは崇敬していることです：聖レオナルド・ムリアルド、聖ルイジ・グァネッラ、聖ルイジ・オリオーネです。

ここに述べたことは実に美しく、私たちに責任感で満ち、勇気づけてくれます。自分たちが、より良く知られ評価されるにふさわしい貴重な遺産を預かるものであることが明らかにわかります。危険なのは、この聖性の遺産を典礼の祝いにとどめ、その霊的、司牧的、教会的、教育的、文化的、歴史的、社会的、宣教的な豊かさと可能性を十分に評価しないことです。

聖人、福者、尊者、神の僕は、大きな価値のある「貴重な真珠」、鉱山の暗闇の中から取り出された金です。教会の中で、またサレジオ家族の中で、キリストの真理と愛の輝きを映し、放つために。

→ **司牧的側面**は、一人ひとりの有効性に結ばれています。世界、教会において、サレジオ家族そのものにおいて、それぞれの社会的、文化的、政治的状況の中で、キリスト者として見事に生きた、その有効性です

→ **霊的側面**は、彼らの徳に倣うようにという招きを伴います。インスピレーションの源、私たちの生活スタイル、使命の源として。主のみ名によって司牧的、霊的に世話をし、関心をもって心にかけることは、真正な聖性の教育の在り方です。私たちは頂いているカリスマによって、このことに特別に敏感でなければならず、高い意識を持たなければなりません。

愛する兄弟姉妹の皆さん、私は確信をもって言うことができます。今日、サレジオ世界の最も大きな差し迫った必要は、さらに多くのことを行うことでも、新たな取り組みを企画することでも、新たな拠点を開設することでもありません……むしろ、私たち一人ひとりの生き方、また共同体として生きる生き方が、イエスの生き方、行動の仕方の継続として時の中で発展し広がる福音となるようにすることです。³⁹つまり、求められているのは、**私たちの聖性なのです！**

今日、世界中に広がる我らが美しいサレジオ家族の父、創立者がそうであったように、私達も聖なる者でありましょう！

教皇聖ヨハネ・パウロ二世の、当時、サレジオ会員に向けられた熱心な呼びかけは、サレジオ家族全体にも、またその各会にも、同様に当てはまります。私たち一人ひとりに向けられた言葉として感じながら、これに耳を傾けましょう：

³⁹ 参照 『奉献生活』, 62.

皆さんは「現代世界のさまざまな挑戦への応答として、再び勇気をもって『聖性に向かう』ことを提起しようと望んでおられます。端的に言うと、それは新たな活動を始めるというよりも、皆さんの出会う若者を聖性へと向かうよう勇気づけるために、妥協することなく福音を生き、あかしすることです。第三千年期のサレジオ会員の皆さん！ 皆さんが熱意あふれる教師、導き手、聖人、聖人を育てる人でありますように。ドン・ボスコがそうであったように。」⁴⁰

私たちの母、キリスト者の扶けマリアに願いましょう、私たちがこのいのちの道をはっきりと見ることができ、一人ひとりがその道をたどることを心から望むよう、必要な光をくださいますように。私たちの遣わされる人々のため、そして私たち自身のために、サレジオの聖性の道を歩む私たち一人ひとりの、また全サレジオ家族の取り組みを、マリアが支えてくださいますように。

母、聖霊のうちに生きる道の師である方が、我らが聖人皆のうちに働いた恵みの不思議なわざを、私たちのうちにも働かせてくださいますように。

キリスト者の扶けなるマリアは私たちと共に歩み、導いてくださいます。

聖性の実りに満ちた年を、皆様のうえにお祈り申し上げます。

親しさをこめて。

総長 アンヘル・フェルナンデス・アルティメ

あとがき

このストレンナ解説を、私たちの列福・列聖申請人が提供する付録をもって締めくくります。この付録の最新の正確な情報は、私たちサレジオ家族にとり、特に、列福・列聖調査に自分たちのメンバーが含まれている、この美しいサレジオ霊性の木に属するすべての会にとり、大きな関心事であるにちがいありません。ドン・ルアの言葉どおり、私たちドン・ボスコの息子、娘たち皆の聖性は、世界の全サレジオ家族の愛する父、ドン・ボスコ自身が生き、私たちに残してくれた聖性の証明になるのです。

⁴⁰ ヨハネ・パウロ二世, サレジオ会第 25 回総会開会にあたってのメッセージ, GC25, 140

付録

サレジオのカリスマのうちに生きた聖性

ここから、次の言葉を念頭に置きましょう：

子らの聖性は、父の聖性のあかしである（ルア神父）

2018 年 12 月 31 日現在のリスト

サレジオ会の列聖推進事務局は、聖人、福者、尊者、神の僕ら、168 名を挙げています。

列聖推進事務局により直接調査が行われているのは 50 人。

さらに 5 人について、列聖推進事務局に調査がゆだねられています。

聖人（9 名）

聖ヨハネ・ボスコ、司祭（列聖年月日：1934 年 4 月 1 日）－（イタリア）

聖ヨセフ・カファッツ、司祭（1947 年 6 月 22 日）－（イタリア）

聖マリア・ドメニカ・マザレロ、おとめ（1951 年 6 月 24 日）－（イタリア）

聖ドメニコ・サヴィオ、少年（1954 年 6 月 12 日）－（イタリア）

聖レオナルド・ムリアルド、司祭（1970 年 5 月 3 日）－（イタリア）

聖ルイジ・ヴェルシリア、司教、殉教者（2000 年 10 月 1 日）－（イタリア－中国）

聖カッリスト・カラヴァリオ、司祭、殉教者（2000 年 10 月 1 日）－（イタリア－中国）

聖ルイジ・オリオーネ、司祭（2004 年 5 月 16 日）－（イタリア）

福者（118 名）

福者ミケーレ・ルア、司祭（列福年月日：1972 年 10 月 29 日）－（イタリア）

福者ラウラ・ビクーニャ、少女（1988 年 9 月 3 日）－（チリ－アルゼンチン）

福者フィリッポ・リナルディ、司祭（1990 年 4 月 29 日）－（イタリア）

福者マッダレーナ・モラーノ、おとめ（1994年11月5日）－（イタリア）

福者ヨセフ・コワルスキー、司祭、殉教者（1999年6月13日）－（ポーランド）

福者フランチセク・ケイシー信徒と4人の同志殉教者（1999年6月13日）－（ポーランド）

福者ピオ九世、教皇（2000年9月3日）－（イタリア）

福者ホセ・カラサンス・マルケス司祭と31人の同志殉教者（2001年3月11日）－（スペイン）

福者ルイジ・ヴァリアラ、司祭（2002年4月14日）－（イタリア-コロンビア）

福者アルテミデ・ザッティ、修道者（2002年4月14日）－（イタリア-アルゼンチン）

福者マリア・ロメロ・メネセス、おとめ（2002年4月14日）－（ニカラグア-コスタリカ）

福者アウグスト・チャルトリスキー、司祭（2004年4月25日）－（フランス-ポーランド）

福者エウセビア・パロミーノ・イエネス、おとめ（2004年4月25日）－（スペイン）

福者アレキサンドリーナ・マリア・ダコスタ、信徒（2004年4月25日）－（ポルトガル）

福者アルベルト・マルヴェッリ、信徒（2004年9月5日）－（イタリア）

福者ブロニスラフ・マルキエヴィチ、司祭（2005年6月19日）－（ポーランド）

福者エンリケ・サイス・アパリシオ司祭と62人の同志殉教者（2007年10月28日）－（スペイン）

福者セフェリーノ・ナムンクラ、信徒（2007年11月11日）－（アルゼンチン）

福者マリア・トロンカッティ、おとめ（2012年11月24日）－（イタリア-エクアドル）

福者ステファン・サンドル、修道者、殉教者（2013年10月19日）－（ハンガリー）

福者ティトゥス・ゼマン、司祭、殉教者（2017年9月30日）－（スロバキア）

尊者（17名）

尊者アンドレア・ベルトラミ、司祭（英雄的徳の宣言の年月日：1966年12月15日）－（イタリア）

尊者テレサ・ヴァルセ・パンテッリーニ、おとめ（1982年7月12日）－（イタリア）

尊者ドロテア・チョピテア、信徒（1983年6月9日）－（スペイン）

尊者ヴィンチェンツォ・チマッティ、司祭（1991年12月21日）－（イタリア－日本）

尊者シモーネ・スルジ、修道者（1993年4月2日）－（パレスチナ）

尊者ルドルフ・コモレク、司祭（1995年4月6日）－（ポーランド－ブラジル）

尊者ルイジ・オリヴァレス、司教（2004年12月20日）－（イタリア）

尊者マルゲリータ・オッキエナ、信徒（2006年10月23日）－（イタリア）

尊者ジュゼッペ・クアドリオ、司祭（2009年12月19日）－（イタリア）

尊者ラウラ・メオッツィ、おとめ（2011年6月27日）－（イタリア－ポーランド）

尊者アッティリオ・ジョルダーニ、信徒（2013年10月9日）－（イタリア－ブラジル）

尊者ジョセフ＝オギュスト・アッリバ、司祭（2014年7月8日）－（フランス）

尊者ステファノ・フェッランド、司教（2016年3月3日）－（イタリア－インド）

尊者フランチェスコ・コンヴェルティニ、司祭（2017年1月20日）－（イタリア－インド）

尊者ヨセフ・ヴァンドル、司祭（2017年1月20日）－（ハンガリー－キューバ）

尊者オクタヴィオ・オルティス・アッリエタ、司教（2017年2月27日）－（ペルー）

尊者アウグスト・フロン、枢機卿（2018年5月19日）－（ポーランド）

神の僕（24名）

列福調査が進められている人々。

エリア・コミーニ、司祭（イタリア）

イグナチオ・ストゥクリー、司祭（チェコ共和国）

アントニオ・デ・アルメイダ・ルストサ、司教（ブラジル）

カルロ・クレスピ・クローチ、司祭（イタリア-エクアドル）

コンスタンティノ・ヴェンドラメ、司祭（イタリア-インド）

ヤン・スヴィエルク司祭と8人の同志殉教者（ポーランド）

オreste・マレンゴ、司教（イタリア-インド）

カルロ・デッラ・トッレ、司祭（イタリア-タイ）

教区での調査結果の布告が待たれるもの

アンナ=マリア・ロサーノ、おとめ（コロンビア）

教区による調査が進められている人々

マティルダ・サレム、信徒（シリア）

アンジェイ・マチェン（スロベニア）

カルロ・ブラガ、司祭（イタリア-中国-フィリピン）

アントニオ・バリエリ、信徒（イタリア）

アントニエッタ・ボーム、おとめ（ドイツ-メキシコ）

ルドルフ・ルンケンバイン、司祭（ドイツ-ブラジル）とシモン・ボロロ、信徒（ブラジル）、殉教者